

主 題：肉に属するクリスチャン①

聖書箇所：コリント人への手紙第一 3章1-4節

かなり前、私はプルメリアという苗木をもらったことがあります。土に挿していたら芽が出ますからと教えられ、私は育てようと思って、近くの園芸屋さんに行って土を買い、植木鉢に入れてそれを挿し込んで成長するのを待ちました。けれども残念ながら枯れました。それ以前もそうだったし、それ以降も枯らせてしまうなら、もう植物には手を出さないでおこうと思いました。当然皆さんも種を蒔いたり、私のように幹を土に挿し込んだら育っていくものと信じて期待します。もしそうでなかったら悲しいですね。

A. コリント信者の霊的状态 1-4節

同じように神は、私たちに下さった信仰も成長することを期待しておられる。もし成長しないのであれば、神が心を痛めることになります。きょう我々が見ていくこのコリント教会の問題は、実は彼らはタイトルのように「肉に属するクリスチャン」たちだったということです。この信仰者たちの霊的な様子というのは、間違いなくパウロの心を痛めたろうし、当然、神の心も痛めたはずです。願わくば私たちがこのみことばを学ぶことによって、ひとりひとりが自分の信仰を吟味する機会になればと思います。

1. 霊的に成長していない 1-2節

きょうのテキスト、1コリント3：1-4は「さて、兄弟たちよ。」、このような呼びかけで始まります。パウロが記したこの手紙の送り先、コリントの兄弟姉妹たちは、間違いなく救いにあずかっていたということを見ることができます。ところが先ほどもお話したように、救いにあずかっているながら、パウロが期待するような信仰者たちではなかったのです。そこでパウロは、愛をもって彼らをとがめていきます。彼らが正しい歩みを始めてくれることを願いながら、彼らにその間違いを明らかにしていこうとするのです。コリント信者の霊的な状態とその問題点をパウロはこの中で教えるのです。先ほども言いましたように、我々ひとりひとりにとっても信仰を吟味する機会となることを願います。

1節「さて、兄弟たちよ。私は、あなたがたに向かって、御霊に属する人に対するようには話すことができないで、肉に属する人、キリストにある幼子に対するように話しました。」とあります。パウロはこの中で三つの形容詞を使ってコリントの人々の霊的状态を表しています。一つ目は「御霊に属する人」、二つ目は「肉に属する人」、三つ目は「幼子」です。

1) 「御霊に属する人」ではない

まず、「御霊に属する人」というのは、霊的な人々のことです。神様の御霊、聖霊なる神によって支配されている人々、もしくは聖霊によって導かれた歩みをしている人たちのことです。この人たちは聖霊によって満たされ、聖霊によって導かれているゆえに、彼らの考えも、思いも、振る舞いもすべてが聖霊に満たされた状態、聖霊に喜ばれる、神に喜ばれる歩みをしている人たちのことです。

2) 「肉に属する人」のよう

二つ目に出てきた「肉に属する人」の「肉」というのは「肉欲的な」とか「世俗的」という意味があります。パウロはここであなたたちはまさに世俗的な人々だと言っています。この「肉」というのは生まれつきの人間の特性であり、人間の行動です。全く神に逆らっている状態を言います。

3) 「幼子」である

三つ目の「幼子に対するように話しました」というのは間違いなく乳児の話ではありません。ある程度の方が当然理解できる者たちのことです。2節を見ると、この「幼子」のことがもう少し説明されています。「私はあなたがたには乳を与えて、堅い食物を与えませんでした。あなたがたには、まだ無理だったからです。実は、今でもまだ無理なのです。」とあります。あなたがたにミルクを与えて堅い食物を与えなかった。その理由は消化できないからです。パウロがコリントの町に滞在した時、彼はキリストの福音を語り、救いにあずかった者たちが成長していくために必要な霊的食物——みことばを教え続けてきたのです。救われて間もない者たちには、当然ミルクを与えます。つまり真理の基本的なことです。そして理解の成長とともに徐々により難しいことを教えていくのです。例えば救いにあずかった多くの人たちは神の恵みによって救われたということはわかります。基本中の基本です。行いではなくて、神の一方的な恵みによって救われたと。そして信仰が成長することによって、実は私たちはその救いは神の予知によるものであり、神の選びであり、それによって神の義をいただき、後には神の栄光にあずかるのだと。

例えばこれを見ても救いには神様のすばらしい真理がたくさんあるのです。ですから当然パウロはその信仰を持った人たちが理解できることを教え、その理解とともにより高度なことを教えていったのです。パウロはそのように1年半にわたってコリントの町で人々を教え続けたのです。ところが、今見て来たように、残念ながらこの人々は成長していなかった。信仰的にまだ幼稚な幼子であった。

◎「救われた人々の特徴」 1コリント2：15－16

こういうことを言うと、恐らく皆さんの中でもそれは自分のことではないかと思われる方がおられると思います。信仰歴は長いけど私はまだ信仰において大変幼稚な存在だと。もう既に私たちはキリストにある幼子というのはどういう信仰者なのかを学んできました。1コリント2：15－16に、救われた者たち、救いを受け入れた人たちの二つの特徴をパウロは記していました。一つはすべてをわきまえる人であり、もう一つはキリストの心がある人であると。

①「すべてをわきまえる」 15節

15節「御霊を受けている人は、すべてのことをわきまえますが、自分はだれによってもわきまえられません。」と。「御霊を受けている人」というのは救いにあずかっている人です。聖霊なる神様をいただいた者たち、聖霊がそれぞれのうちに内住している人たちのことです。「すべてをわきまえる」というのは、神の真理を理解するだけではない、判断できる人です。ですから救いにあずかって初めて神の真理がわかるだけではない。神が望んでおられること、神が求めておられること、神のみこころを私たちは知ることができるし、その判断ができるのです。

②「キリストの心がある」 16節

16節には「キリストの心がある」、キリストの心が与えられているのだと言いました。つまりキリストの思いが私たちの思いになっているということです。キリストが愛することを愛するように、キリストが憎まれることを憎むように。新しく生まれ変わった私たちは、何とかこの主に喜んでいただきたい、そしてこの主が喜んでくださった、それが私たちの喜びである、そんな人へと私たちは変えられたと。イエス様が地上に来られた時には、イエス様はみこころに従順に従うことによって、父なる神を喜ばせることだけをなさいました。私たちもそのように生きていきたい。自分を喜ばせる人生から、神を喜ばせる人生へと私たちは生まれ変わったのです。ですから主が喜んでくださることを求めて生きている人というのは、しっかりとそれを探って、それを見つけて、そのように歩んでいこうとします。もっとも主と似た者へと変えられていくことを願って、みことばを学び、みことばを実践し、そしてよりこの方のすばらしさが証しされることを期待しながら生きていこうとする、まさにそのように生きていく、そのように変えられていくということが成長です。パウロはこれが救われている人たちの特徴だと教えてくれたのですが、悲しいことにコリントのクリスチャンたちはこうでなかったのです。

◎「コリント教会の人々の特徴」

2：14に「生まれながらの人間は」と書いてあります。3：1に「肉に属する」者、3：3にも「肉に属している」と、彼らのことをそのように表すのです。ということは彼らは救いにあずかっているが、何が神の前に正しいのか、何が神に喜ばれることなのか、その判断ができていなかったのです。まさに救われていない人たちと同じようでした。

この現実を突きつけられた時のパウロがどれほど心を痛めたか想像がつかます。パウロが初めてこのコリントの町を訪問したのは紀元51年の春、大体3月ごろです。そして52年の9月まで1年半にわたってパウロはこの町に滞在して神のことばを伝え続けた。先ほど見たように。1コリントが記されたのは56年と言われています。そうすると、初めて訪問した51年から約5年がたっています。信仰を持って歩み始めたコリントのクリスチャンたち、約5年の月日がたったにもかかわらず残念ながら彼らはまだキリストにある幼子でした。救いにあずかっているが、しかも霊的成長のために必要なすべてのものが備えられ、与えられているにもかかわらず成長していない人々、パウロはその現実を見て確実に悲しんだでしょう。

2. 霊的に成長していない理由：「まだ肉に属している」から 3節

パウロはこの現実を見て、霊的に成長していない理由について3節の中で語っています。3節の初めのところに「あなたがたは、まだ肉に属しているからです。」と言っています。あなたたちには肉の特徴があると。もう既に見てきたように、まだあなたがたはこの世の人々、普通の人々のように歩んでいると言うのです。この人々は神様の前に正しいことが一体何なのか、そのような願いはあるはずですが。しかし彼らとその判断に用いる基準が実は聖書ではないのです。コリント教会の大きな問題はこの世の知恵に頼っていたことです。それからなかなか抜け切ることができなかったのです。彼らにとって最も大切だったのはこの世の知恵だったのです。ですからみこころを判断するとか、みこころを選択するとか、それを彼らは自分たちの考えや自分たちの思い、この世の知恵でもって行っている。パウロはそれを見て、それはまさに救われていない人々と同じではないかと。かつては我々は確かにそうだった。でも救

いにあずかった私たちは神様からいただいたこのみことばに基づいて生きていくのです。これが私たちの指針です。私たちの歩みが正しいかどうか、みことばと照らし合わせてみることです。そしてもし私の歩みが正しいかどうかわからなければ、そのように歩んでいる人たちに自分の歩みが正しいかどうかを相談するはずで、また、祈りを求めるはずで、でもみことばを見る限りでは、悲しいことにそう言ったことがなされていない。

自分の考えが最善であり、そこには間違いがない。そう考えるとところに私たちの問題があるのです。私たちに必要なのはみことばに対する柔軟性です。というのは私たちが歩んで来た歩みとみことばが教える歩みとは一致しません。そうすると、私たちはこの神のことばに砕かれて耳を傾ける必要があります。私たちが信仰者として歩むその歩みにおいて大切なのは、このみことばが何を教えてくださっているかです。神のみこころを知ることが必要だからです。ですからパウロはこのコリントの教会の人たちがまだ肉に属している、この世的な歩みをしている、世俗的な歩みをしていることを知って、それが原因だと指摘するのです。

3. 霊的に成長していない証拠 3b-4節

パウロはその後でこの人たちがまだ霊的に成長していない証拠を挙げています。

1) 「ねたみや争い」の存在：

3節後半「あなたがたの間にねたみや争いがあることからすれば、あなたがたは肉に属しているのではありませんか。そして、ただの人のように歩んでいるのではありませんか。」とあります。まずあなたたちが霊的に成長していない証拠としてパウロが挙げた一つ目は、あなたたちの間に「ねたみや争い」が存在しているからだ。パウロは教会の中にそういった罪が存在していることを知っていたのです。

(1) 「ねたみ」

説明するまでもないですが、「ねたみ」というのは新約の中に16回出てきます。嫉妬ややきもちです。また悪い意味での熱心さなのです。これが救われていない人々の特徴であるということはみことばが我々に教えてくれています。例えばローマ13：12-14でパウロは「夜はふけて、昼が近づきました。ですから、私たちは、やみのわざを打ち捨てて、光の武具を着けようではありませんか。遊興、酩酊、淫乱、好色、争い、ねたみの生活ではなく、昼間らしい、正しい生き方をしようではありませんか。主イエス・キリストを着なさい。肉の欲のために心を用いてはいけません。」と言っています。このような正しくない歩みから離れていきなさい。「やみのわざを打ち捨てて」と言っています。私たちは救いにあずかった者として、それにふさわしく生きていきなさい。「争い、ねたみの生活ではなく」で「昼間らしい、正しい生き方をしようでは」ないかと。それはまさにやみの行いだと教えます。

(2) 「争い」

また同時に「争い」ということばは「不和」とか「口論」です。ローマ1：29-32でパウロは救われていない者たちの姿を暴露するのですが、「彼らは、あらゆる不義と悪とむさぼりと悪意とに満ちた者、ねたみと殺意と争いと欺きと悪たくみとでいっぱいになった者、陰口を言う者、そしる者、神を憎む者、人を人と思わぬ者、高ぶる者、大言壮語する者、悪事をたくらむ者、親に逆らう者、わきまえのない者、約束を破る者、情け知らずの者、慈愛のない者です。彼らは、そのようなことを行なえば、死罪に当たるという神の定めを知っていながら、それを行なっているだけでなく、それを行なう者に心から同意しているのです。」と。神を知っていながらその神を愛することも、信じることもしない人間がいかにか神の前に罪を犯しているのか記されています。彼らは神を知ろうとしたがらず、自分の好きなように生きていきたので、神様は「ではそうしなさい」と。その結果人々は「あらゆる不義と悪とむさぼりと悪意とに満ちた」生活、「ねたみと殺意と争いと欺きと悪たくみとでいっぱいになった」生活、「陰口を言う者、そしる者、神を憎む者、人を人と思わぬ者」とリストが続いています。ですから、このねたみや争うことを神がお喜びにならないことは明らかです。きょうのテキストの3節に「あなたがたの間にねたみや争いがあることからすれば、あなたがたは肉に属しているのではありませんか。そして、ただの人のように歩んでいるのではありませんか。」と。「肉に属している」、「ただの人」というのはこの世の救われていない人たちのことです。その人たちと生き方が全く同じだと言うのです。しかも「ただの人のように歩んでいるのではありませんか」、「歩んでいる」というのは現在形が使われています。そのように歩み続けているのです。

「ねたみ」と「争い」、この二つに共通していることがあります。それは、これらすべて自己チューな生き方です。すべてが自分の考えに基づいているのです。自分が判断の基準になっているのです。例えば自分よりも成功している人を見たら我々はねたむのです。なんであいつが自分よりも給料がいいとか、自分よりもいい家に住んでいる、何であいつが……。自分よりも幸せそうな人を見た時に、なぜこの人が自分よりも幸せなのだと。結局問題は基準がいつも自分にあることです。この物差しを持って周りを見ているならば必ず心は「ねたみ」に満たされます。この罪が自分の心を支配すること、自分の心にのさばることを私たちは許してはいけません。

先ほど2:15から「わきまえ」ということを見ました。私たちは一体何が神の前に喜ばれるのかを判断して、それを選択していく必要があります。信仰者の皆さん、神様はちゃんとあなたに必要なものを必要なだけ下さいます。旧約の時代から全く変わっていない。余計に与えられたら、そのために私たちは目をとめてしまうかもしれないし、少なれば我々は神に不平不満を言うかもしれない。だから神様はちゃんと必要なものだけ下さる。それは神が我々の必要をちゃんと知っておられるからです。だから私たちは自分に与えられているものをしっかりと覚えることです。物質的にもそうだし、健康的にもそうです。自分が置かれている環境もそうです。感謝することです。自分が願っている理想と違ったら必ずそこには不満が出てきます。この環境が変わればとか、自分が健康になればとか、自分の欲しいものを手に入れることができたなら私は満足する、そんなことを思っている限り、決してあなたは満足することはない。もう我々はそれを知っています。神はあなたや私に何が必要であるかご存じであり、それを与え続けてくださっている。我々が学ぶことは、与えられているものを感謝することです。あの人があんなものを持っているけれども、私は持っていない。そうではないのです。神はあなたに必要なものをちゃんと下さっているのです。「ねたみ」や「争い」、結局自分中心な物の考え方に原因があるのです。

2) 「分派」の存在

パウロがこの人々が非常に信仰的に幼稚な証拠として挙げた二つ目の理由が、教会の中に分派が存在したことです。4節「ある人が、『私はパウロにつく。』と言えば、別の人、『私はアポロに』と言う。そういうことでは、あなたがたは、ただの人たちではありませんか。」と。パウロ派がいるし、アポロ派がいるのです。この教会には偏愛——個人的好き嫌いが存在していたのです。実はこれも自己チューです。私はこの人が好き、でもこの人は嫌い。なぜなら私の考えていることとこの人は同じだから、私の考えるようにこの人は考えるから。私はこの人の考えが理解できないから嫌い。気づかなければいけないのは、こういった思いを私たちにもたらしめているのは聖霊ではないのです。もちろん聖書という基準に照らし合わせてそれと違うことを言っているのは別の話です。なぜなら私たちは性格的にとか、いろいろなところで好きだ嫌いだとすぐ思ってしまう。そんな思いは聖霊が与えるのではない、肉が与えるのです。なぜなら教会外にそういう思いに満たされた人が山ほどいません？悲しいことにそういう人々が教会の中にも存在しているということです。かつての私たちはそうだった。でも我々はそこから救い出されたのです。我々は違う価値観を持っているのです。聖霊が私たちのうちに働くならば、私たちは喜んで従っていこうとするのです。教会なら教会の組織にあって、霊的なリーダーに従っていこうとするし、社会にあってそこにあるリーダーに従っていこうとする。御霊に満たされたならば従順というのが伴っていくのです。もちろんみことばという基準に基づいて我々は判断するのです。ですから、先ほど見た「ねたみ」や「争い」も結局は自分が物事を中心にあつた。自分の思いどおりになるかならないか。自分の夢がかなうかどうか。自分の願い事が満たされるかどうか。教会に存在した分派というのは自分が好きなのか嫌いなのか、基準は自分だったのです。

◎どうしてこのような人々が教会にとって危険なのか？

こういったことが教会にとっていかに危険なのか、みことばはそのことを教えています。

①「分裂」を起こすから！ ユダ19

ユダ19「この人たちは、御霊を持たず、分裂を起こし、生まれつきのままの人間です。」とあります。つまり教会の中に入り込んでくる救いを知らない人たちは、今我々が見てきたように、教会を分裂に導いていくのです。なぜなら神のみこころは神を愛し、我々隣人を愛するのです。確かにみんなを愛するという事は難しいことを知っています。でも我々はそのために祈るです。その人たちに不幸が訪れることを願うのではなくて、幸せが訪れるように祈るわけです。でも確かに神を知らない人々が教会の中に入り込んできて、あの人はすばらしい、この人はとんでもない人だと分裂をもたらすのです。

②また「混乱」をもたらすから！ エペソ4:14-15

また同時に、こういう人々が教会にとって大変危険だと言うのは、彼らは信仰的に大変幼稚でまだ根がしっかり張られていないから、いろいろな教えに惑わされるのです。パウロはエペソ4:14-15でこう言います。「私たちがもはや、子どもではなくて、人の悪巧みや、人を欺く悪賢い策略により、教えの風に吹き回されたり、波にもたせられたりすることがなく、むしろ、愛をもって真理を語り、あらゆる点において成長し、かしらなるキリストに達することができるためなのです。」、結局言っているのは根なし草の話です。根がしっかり張られていないとさまざまな教えに惑わされて、流されてしまうということです。そうするとそういう人たちを通していろいろな教えが教会の中に入り込んでくる危険性があります。信仰において成長していないということは大変大きな問題だということです。そういう人たちが教会の中にさまざまな問題をもたらす可能性があるのです。なぜなら彼らは神が喜ばれることではなくて、自分

の考え、自分の判断が正しいとして主張するからです。聖書に立っていなければ必ずそこにはさまざまな問題が生じるのです。

4. 霊的に成長しない理由 ヘブル5：11-14

きょう私たちはコリントの兄弟姉妹たちが悲しいことに信仰において成長していなかったことを見ました。しかし、パウロ大先生によって1年半もの間直接教えられたのです。みんな学びたいと思うではないですか。パウロから1年半学んだこのコリントの教会がなぜこのように信仰において成長していなかったのか——。その理由を知りたいと思いませんか？これはもちろんコリントの教会だけの問題ではない。そして時代に関係なく人間の問題なのです。

1) 「霊的幼子の特徴」：どんな人か？

ヘブル書の著者が我々にそれを教えてくれているので、そこを開いてみてください。ヘブル5：11-14「この方について、私たちは話すべきことをたくさん持っていますが、あなたがたの耳が鈍くなっているため、説き明かすことが困難です。あなたがたは年数からすれば教師になっていなければならないにもかかわらず、神のことばの初歩をもう一度だれかに教えてもらう必要があるのです。あなたがたは堅い食物ではなく、乳を必要とするようになっています。まだ乳ばかり飲んでいような者はみな、義の教えに通じてはいません。幼子なのです。しかし、堅い食物はおとなの物であって、経験によって良い物と悪い物とを見分ける感覚を訓練された人たちの物です。」、このヘブル書の著者は霊的幼子の特徴をまず記しています。

(1) 霊的無関心 11、13節

①「耳が鈍く（11節）」

霊的幼子の特徴は霊的無関心だと教えています。11節「耳が鈍くなっているため」と書いてあります。この「鈍」ということばは「のろい」とか「遅鈍」、動作が遅いこと、機転が利かないことです。「なまけ」とか「怠惰」という意味があります。この人の問題は霊的なことへの関心がないために、みことばの学びなど霊的成長に役立つことに消極的なのです。だからいつまでたっても成長しないのです。

私たちはどうしたら信仰が成長するのか知っています。みことばが教えてくれるからです。神のみことばを正しく学ぶことです。そしてそのみことばに従っていくことです。そうやって成長するのです。もちろん私たちは教会にあって、自分に与えられた賜物を使うことによっても成長します。それによって自分だけではなくて周りの人たちも成長する。どうしたら成長するのか、みことばは我々に教えてくれています。でも彼らの問題は、みことばが言ったように「耳が鈍」といっているのです。だれかに問題があるのではないのです。彼ら自身に関心がないのです。みことばを学ぶと言っても別に間に合ってます、十分学んできましたと。そうするとなかなか信仰というのは成長してこないのです。例えば私たちがみことばを学ぶことにどれだけ貪欲であるのか——。そのことを考えてみる必要があります。

②「通じてはいません（13節）」

13節を見ると、「義の教えに通じてはいません」とあります。この「通じてはいません」ということばは、「経験不足」とか「未熟な人」、または「無知」や「努力していない人」という意味があります。ですからこの著者は幼子が教えに関心を示さないように、霊的幼子は「義の教え」、つまりみことばの教えに対して関心を示さないと。だから正しい選択をして神の前に正しく生きることも無関心であると。これは「義の教え」に通じていない、「義の教え」に対して全く無知であると。それを学ぼうとしなからずです。

(2) 霊的未熟（霊的幼子） 14節

二つ目の特徴として14節に記されているのは、霊的に非常に未熟な存在だということです。

①判断力に欠ける

・「見分ける」 14 a 節

まず判断力に欠けるのです。14節に「経験によって良い物と悪い物とを見分ける」と書いてあります。今見たように「見分ける」というのは「区別する」とか、「判別する」という意味があります。ですから正しいことと悪いことの区別、判別を意味しています。幼子というのは正しいことと悪いことの判別ができないのです。霊的幼子も同じで、霊的なこと、つまり何が神の前に正しいのか、そういったことが判断できないでいると。

・「感覚」 14 節

この「見分ける」ということばは、良いことと悪いことの判断をするためには「見分ける感覚を」と書いてあります。「感覚」というのは「霊的感受性」であったり、「霊的判断力」という意味です。すなわち神の前に何が正しくて喜ばれることなのか、自分だけでなく他のクリスチャンたちの成長には何が必要なのかを正しく判断できない人です。

ですからヘブル書の著者はここで信仰的に幼い人、靈的な幼子は靈的なことに関して関心を払っていない人、判断力がないためにこの人たちは靈的に未熟な人です。しっかり何が正しいのか、そういった判断ができない。ですからこの人たちは自分のことしか見えないのです。神の視点から物事を見たり、考えたりできないのです。神の視点から物事を見るというのは、神が何を喜びになるのかを考えるのですが、残念ながらそれができないのです。ウィリアム・パークレーという先生は「すねたり、癩癩を起こしたり、自分の思いどおりにならなければ何もしない人、このような大人が教会の中にいることはまことに困ったものだ」と言っています。なぜなら彼らの関心は自分のことだからです。

2) その原因：「怠惰」 11、14節

もう一度ヘブル書14節を見ると、こういう人々が幼子の特徴だと見たのです。その原因が一体どこにあるのか。

(1) 「耳が鈍くなった(11節)」

まず先ほどから見ている11節「耳が鈍くなった」、この著者は私たちに自分の信仰が成長しないのは、自分に責任があると言うのです。なぜならこのことばが実は完了形を使っているからです。過去になされたこと、その結果が現在に表されているのです。つまりこの神様の真理というものに対して関心を払わない決心をして、その結果が今も伴っている、その状態が今も続いているということです。だから怠ける選択をした。そしてその選択は今も続いているのです。ですからこのヘブル書の著者は、そこに問題があると言うのです。あなたが神の真理を学ぶことを怠けたから、今もあなたの信仰は成長していないと。ですから靈的に成長するということは各自がまず成長したいという正しい選択をして、そのために必要なことを実践していくことです。信仰を成長させたいとあなたが望めば、信仰は成長するのです。みことばが我々に言うのは信仰が成長していないのは神のせいでもないし、周りの人のせいでもない。あなたに問題があると。それをあなた自身が望んでいないからだ。

(2) 「訓練された(14節)」

また14節を見ると、「経験によって良い物と悪い物とを見分ける感覚を訓練された人たちの物です。」、「訓練された」ということばがあります。このことばは「鍛錬する」という意味です。ちょうどスポーツ選手がみずからを鍛えていくように、我々クリスチャンの日々の生活を通して靈的判断力において成長するように努めていくことが必要だと。努力が要するという事です。つまりイエス様の救いにあずかった私たちは神に喜ばれることをしたいという願いを持っています。神が喜ばれることを選択したいと。でもその選択において成長するためには我々は数々の失敗も経験します。でもそうして私たちは成長していくのです。みことばを通してこれはみこころだと思っても、後になって見たら、それはみこころに添ってたのではなくて自分の願い事がかなうようにと思っていたかもしれない。いろいろなことに気づかされて、そしてそういうところから我々は少しずつ成長していくのです。ですからこのヘブル書の著者が言うように、訓練が要るのだと。まさにそのスポーツ選手たちがみずからを鍛えるように、鍛えることによって0.1秒でも速くなるように。そのように我々信仰者も努力が要ると。みことばを読むことです。みことばを学ぶことです。みことばを実践することです。そして我々は靈的判断力というのを養っていくのです。

皆さん、ご自分の信仰を振り返ってみて、皆さんの信仰生活の中で例えばみことばを読む時間はどうです？ひよっとしたらみことばを読むことが目標になっていたら、内容なんかどうでもいい、みことばを読んだことで満足するかもしれない。でもそれは目的ではない。我々はみことばを通して神を知りたいのです。1日1章読めないかもしれない。1日1節かもしれない。でもそうして私たちは少なくとも神を知りたいと思ってみことばを読んでいるかどうか。こうしてみことばを通して学んだことを我々は日々の生活において実践しようとしています？そのために我々はそのみことばをしっかりと忘れないように努力しなければいけません。なぜならすぐに忘れてしまう私たちです。そうして我々は主がこう教えてくださった、それを実践していこうと。こうやって集会に来るのも大変かもしれない。でもそうして私たちは神のことを知って神にあって成長したいと願うゆえに、神が私たちに教えてくださっていることをしっかりと行い続けていこうとするのです。もし私たちがこういったことに対して怠けているならば、結果は言うまでもないでしょう。年数だけがたっていて我々の信仰は成長していない。その原因はどこにあるのか、みことばがちゃんと我々に教えてくれます。

信仰者の皆さん、感謝なことに神は私たちに何度も悔い改めの機会を下さるのです。ひよっとしたら皆さんの心に神様が働いてくださって、私の信仰生活は本当に怠惰だったなと、怠けていたなと、みことばをただ聞くだけに満足していた。集まることだけに満足していた。聞いたことをすぐに忘れて覚え続ける努力もしていなかった。もっと言えば本当に神様のみことばに従って何とか成長し、もっと神の栄光を現していきたい。頭ではわかっていたけれども、心ではそんなふうには思っていなかった。あなたがどんなふうには思っておられるかは、あなたのご存じだし、神のご存じです。神様は私たちに悔い改め

の機会を下さって、私の不信仰を赦してくださり、ただ教会に集うだけで満足していました。あなたはそれで満足なさらないし、あなたはそんなことを私たちに言われているわけではない。神様がもし皆さんの中に何かを働いておられるのなら、その神の導きに従うことです。

JOYJOY（当教会夏の子ども会）の中で子どもが親に「一番大切なものはなに？」と聞いたそうです。聞かれた親は答えに躊躇しました。その時にその子どもが「神様でしょ」と言ったそうです。そのとおりですよ？問題は私たちがそんなふうにいるかどうかです。神が一番だ。神が喜んでくださることが一番だと。神の栄光を現すことが一番だと。そのためにはどう生きるべきなのか——。みことばはちゃんと教えてくださった。それに従っていくことです。しっかりみことばを学んで、神の助けをいただきながら実践し、毎日の生活の中で何が神の栄光を現すことなのか、何が神の喜ばれることなのか。神の助けをいただきながら正しい選択をすることです。悲しいことにコリントの教会にはそれができていなかったのです。そしてこのヘブル書の著者が言うように、コリントだけではない、私たちひとりひとりの問題でもあるのです。しっかりみことばの教えに従っていきましょう。そうやって我々は生きるのです。